

S なごや「聖歌」だより 11月号 20

目で見える聖歌



降誕祭

至と高きには光栄神に歸し、
地には平安降り
人には恵み臨めり。

(ルカ伝 1:14)

このことばは降誕祭のお祈りの中で、何
度も唱えられ歌われます。

ルカの福音書によれば、星空の下で夜通
し羊の番をしていた貧しい羊飼いたちに
主イイススの降誕が告げられました。

天使は歌います。
羊飼いも歌います。
私たちも歌います。

正教会の歌はいつも現在形です。西の教会の賛美歌などは過去形のものが多いそうです。

「今、主イイススがお生まれになった！」

わたしたちにとって降誕祭は2000年前に起こった出来事の記念日ではなく、
今、この時、私たちの救いのために、時空を越えて私たちのただ中にお生まれになります。

私たちは胸に赤子のイイススを抱きとめ、歌います。

今、救いは始まったのです。

ウラディミル神学校の聖歌研修 その2

マリア松島純子



2. 講義

この「伝道教会と聖歌の夏の研修会」は96年から毎夏開講され、教役者に限らず一般信徒にも広く門戸が開かれています。今年は全米各地から約70名が参加し、そのうち聖歌部門は25名ほどでした。毎朝7時半に聖堂で早課、朝食、午前中2コマの講義、午後2コマの実習、晩課、夕食後さらに9時まで授業があり、かなりのハードスケジュールでした。

今年のテーマはLIVING TRADITION（「生ける伝統」）で、正教会は伝統を正しく伝えている教会と言われますが、あらためてその伝統とは何か、何を守り何を伝えてゆかねばならないかをそれぞれの立場で考えました。

午前中の講義は両部門共通で、伝統とは神の福音を伝える器であること、正教会は諸々の慣習やしきたりと区別して「聖書」「教義」「信経」「奉神礼」などを「聖伝」として特に大切にしますが、それらがどのように成立してきたかを学び、さらに「聖体礼儀」や「洗礼機密」などの古い形を見直すことで今私たちが行っている儀式の深い意味を探りました。



講義風景 講師はジョン・パー神父、私は中央後ろから二番目でちょっと眠そう

今回のゲスト講演者は世界的に有名な教理史学者のヤロスラフ・ペリカン教授でした。ルーテル派の牧師さんの息子として生まれ、教理の研究をするうちに正教会がキリスト教の伝統を正しく伝えていることに至り、ついに5年前に正教に帰正されたそうです。日本語でも講談社学術文庫から「イエス像の二千年」が出ています。

プロテスタント教会では「書かれたもの」としてある「聖書」だけを大切にするが、それ以外に「書かれない伝統」があること、それは主教を中心とした教会そのものが連綿と伝えてきたことを色々な事例を上げながらお話し下さいました。

英語力が十分でない上に時差ぼけで、「難しくてさっぱりわからない。」とルームメイトにぼやいたら「私にも難しいわよ。」というのでちょっと安心(!?)。何より助かったのは、翌日には講義を収録したテープが学内の本屋さんに並ぶのです。さすがアメリカはスピーディと妙に感心してしまいました。帰ってから何度も聞き直しています。

このほかにウラディミルの教授陣による様々な講義がありましたが、私にとって特に面白かったのは今行われている奉神礼が、どういうふう形作られてきたかという授業でした。

(次回につづく)

お知らせ

降誕祭の聖歌練習。主日祈祷後も行います。

毎月練習日第二日曜日(代式祈祷の日)

11月9日(日)

聖歌基礎からレッスン(今月は降誕祭)

11月4日(火) 16:00~

11月21日(金) 聖体礼儀後

誦経練習(聖歌の方もご参加下さい)

11月29日(土) 14:30~

今年の降誕祭は...

12月24日夕刻から、晩堂大課、早課から聖体礼儀まで続けて行います。長いお祈りになるので、誦経も複数交替で行い、聖歌も工夫したいと思っています。詳しいことは練習の時にお知らせします。

ホームページのご案内

もう少し詳しく

東方正教会の聖歌

<http://www.orthodox-jp.com/maria>

なごや聖歌だよりのホームページ

<http://www.orthodox-in.com/music>